

姉妹校交換学生32年



ミシガン大学との交換学生制度に関しては、期せずして小倉英夫と私の意見は一致した。教育プログラムの一環として、学生に国際的視野をひろげる機会を提供するプランだ。

私は25歳のとき、ひとりドイツのボン大学に出張した。欧州3週間の旅だったが、その強烈な印象は今でも忘れない。今の若者はネットで世界がわかると錯覚しているが、現地を踏まなければ天と地の差がある。

国際歯学研修会とあわせて、Dr.R.L.Christiansenに提案したが、彼はなぜか戸惑ってスムーズに進捗しなかった。それでも、本学側は、夏休みに両学部の5年生6名と同行教員を派遣するとし、昭和60年末には募集要項を学生に通知した。

「まず、パスポートを取ってください」

私が、選ばれた両学部の交換学生に告げた一言である。今ではありえないが、6名の誰もパスポートを持っていなかった。

昭和61年（1986）7月13日、最初の交換学生は、ミシガン大学留学経験のある助教授宮川行男が同行して、ミシガン州アナーバー市に赴いた。20日後の7月31日に、ミシガン大学交換学生2名を連れて帰国した。

2名は、本学の6年にあたるシニアクラスの男女

で、口腔外科の手術室で悪性腫瘍の手術を見学し、「衝撃的だった」と洩らした。

実は、男子学生が正真のベジタリアンだったので、慣れない私たちは天手古舞（てんてこまい）させられた。後日、向う様から丁寧な詫び状がきた。

翌年昭和62年は、カナダのブリティッシュ・コロンビア大学（UBC）が加わり、両校9名を受け入れた。その後、UBCとシアトルのワシントン大学（UW）に代わる。金髪の女子学生が、私に「素晴らしいサマーヴァケーションを送りました」と興奮醒めやらぬ面持ちで語った。「…一生忘れません」。

平成30年の現在まで交換学生は32回を数え、派遣・受入れの総数は427名にのぼる。このうち、湾岸戦争が勃発した平成3年（1991）は中止になった。チャンスを失った同年の交換学生は、今でも会うと口惜しがる。彼らが低学年から英会話を習っているのを知っていたので、私は「ゴメン、ゴメン」と謝まるばかりだった。

現在はほかに、台湾の中山医学大学との交換学生、英国のマンチェスター大学との交換学生、中国の四川大学華西口腔医学院への訪問学生、タイのマヒドン大学からの来訪学生を実施している。

（写真：昭和62年8月、新潟歯学部の本館テラスにつどう交換学生と本学学生たち）